

11月4日から18日まで、読書の秋の恒例イベント 第4回友の会ウィークが中央図書館で開催されました。今号は友の会主催及び友の会会員が所属しているボランティア団体によるイベントを特集しました。

友の会 ナイトセミナー

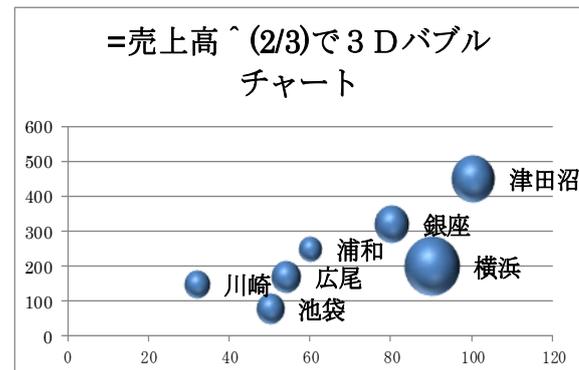
駅前生涯学習塾

ホモ・ルーデンス 《遊び心のすすめ》

2012年11月9日に開催した友の会ナイトセミナー第4回の報告です。Homo ludensとはオランダの歴史家Johan Huizinga(1872—1945)が提唱した概念で「遊ぶ人」という意味のラテン語です。彼の主張は、遊びこそが人間活動の本質であり文化を生み出す根源であるというものです。

とかく遊びは労働とは対極にある無駄なものと考えられがちですが、両者は別世界の活動とは限りません。その例としてオフィスワークにおける不思議発見の事例を紹介しました。エクセルで人気のあるバブルチャートに誤りが潜んでいたこと。そしてプログラムを修正するような手間をかけなくてもグラフを正しく描く「裏ワザ」を工夫しました。

このように、一見単調そうな日常業務においても好奇心



心を満たしたり、遊び心を発揮することはできます。もちろん仕事に直結しない遊びも結構です。なんの成果も求めない遊びの例として、私自身の下手なクラシック・ギターの演奏を披露させていただきました。

お勤め帰りの“駅前生涯学習塾”が目的のセミナーでしたが、今年は参加者が少なかったのが残念でした。講演会のタイトルの付け方が分かりづらかったのかもしれないと反省しています。



朝野熙彦（多摩大学大学院教授、葛飾図書館友の会会長）

図書館友の会 ホームページ

PC用URL: <http://katsutomo.jimdo.com/>

携帯用URL: <http://goo.gl/c6uEk>



携帯バーコード

講演会や映画会などイベントのお知らせ、友の会通信、月1回発行のたんしんなど情報満載です

テネシー・ウィリアムズ 作『罨』と、原 千代海 作『老婆の年金』を熱演

葛飾プロフェッショナル区民劇団《Katsushika H.A.M》が、ことしは11月4日、ウィークのオープニングを飾るコンパクトな一幕もの舞台劇を二つ披露しました。

この劇団は葛飾区文化振興財団の支援を得て誕生した「かつしかドラマスクール」の受講生を中心に結成されたプロの演劇集団ですが、友の会ウィークのために無償の協賛公演を続けてきました。

第1回の「友の会ウィーク」の際はコント劇『バス停にて』ほか。第2回は『井上ひさし、別役実によるコント笑劇集』、第3回は『ハンス・ザックスによる笑劇集』など、笑いとペースに満ちた楽しいレパートリーを繰りひろげてきましたが、今回は二つの対照的な作品を取り上げています。



『罨』は、映画『欲望という名の電車』で知られている、アメリカの劇作家テネシー・ウィリアムズ（1911～1983）の一幕劇です。舞台はミシシッピ州のブルウマウンテン。登場人物はグローリアという名の女優と、その母親の二人だけです。成功への道が閉ざされながらも夢にあがくアメリカ社会の一面を鋭く描いた作品です。出演された皆さんの見事な演技が大きな拍手を導きました。

『老婆の年金』は、イプセンの翻訳で知られた原千代海（1911～2005）の作品で、避暑地にお手伝いさんと暮らす老婆の一幕物の喜劇です。老婆が住んでいる別荘の処分を、不動産業者に依頼しますが、この物件を購入するために妻と娘を連れて下見に来た欲張りの会社社長を手玉にとり、仮病を装いながら売買と老後資金を年金支給のかたちでからませ、好条件で契約を成立させる喜劇です。だます方もだまされる方もなんとなく納得してしまうストーリーの面白さが笑いを呼び、さすがにプロの演劇集団の公演でした。2作品とも、劇場としての条件をまったく備えない会議室を、立派な劇場空間として構成し、盛況裡に終了しました。

葛飾音訳ボランティアの会

視覚障害者がソロで楽器演奏、落語も披露

会員の朗読、さらに漫画「こち亀」の音訳劇も

11月11日（日）午後1時半からは葛飾音訳ボランティアの会主催による視覚障害者と合同の「楽器演奏・落語・朗読」の会が開催されました。ヘルパーさんと一緒に来られた人たちや同会員を含め来場者は約60名。

まず目の不自由な方たちによる大正琴、トランペットとハーモニカ、さらにはバイオリン、いずれもソロ演奏です。最近習い始めたという楽器で、3人の方が“荒城の月”“聖者の行進”“長崎の鐘”やバッハのメヌエットなどを一生懸命に熱演、見事な演奏ばかり。

そして2年前に葛飾区の落語入門講座を受講し、落語指南所に入会したという腰医亭もんだ郎さんによるプロ並みの、ダジャレを交えた「幫間鰻（ほうかんうなぎ）」には会場から笑い声がおこりました。

休憩のあと、葛飾音訳ボランティアの会の会員による約30分にも及ぶ藤沢周平の「雪明り」朗読に来場者は静かに聞き入っていました。



最後は「こちら葛飾区亀有公園前派出所」第175巻の「愛犬コンビの巻」を漫画のコマの情景を会独自に工夫・音訳化した会員10名による朗読劇。漫画に描かれている様子をナレーターが説明しながら、両さん、犬、電器屋や詐欺師などの役を担当し、息もつかせぬタイミングでそれぞれの役を台本片手に演じ表現していました。漫画を音訳するという活動の成果を垣間見た思いがしました。

このような催し物はとても珍しく、開催までこぎつけた会員の熱意に感服した時間でした。

友の会会員が所属するグループが「おはなしのへや」で 幼児に手遊び、語り、紙芝居やパネルシアターなどを好演

11月4日(日)午後からの毎月定例の友の会おはなしくらぶの「おはなしかい」をスタートに、ウィーク期間中、友の会会員が所属している4団体のボランティアグループによるイベントが計6回開催されました。

肌寒くなりはじめた館外とは違い、「おはなしのへや」には床暖房があり、赤いヒモのついたスタンプカードを首から下げた子供たち(イベント終了時にスタンプを押してもらい、12個集めると図書館の児童室から賞状とプレゼントがもらえる)はお父さんやお母さんの膝にだっこしてもらったり、体育館すわりや正座、中には寝転んで聞くなど、思い思いの格好で各回約30分間のプログラムを楽しみました。

11月10日(土)午前と11日(日)午前の2回開催した紙芝居サークル「飛行船」は、区の講座受講生が結成し、活動歴8年。会員約15名が2グループに分かれ、保育園・児童館・老人ホームなどで月5回くらい活動。1回目は手遊びを入れた“桃太郎さん”の語りや紙芝居。そして第2回目は紙で作った小箱からスカーフを順番に抜き取らせ、どんな色の布が出てくるか子供たちは興味しんしん。ピンクのハッピーを着た2名の女性ボランティアがわらべうたやどんぐりを使った手遊びなどを交えながら紙芝居を見せました。



10日(土)午後と17日(土)の午前中は「おはなし夢時計」。この会は、図書館からの呼びかけで現在の代表が講師になり、その受講生が2002年結成した会員約20名の“語りの会”グループ。児童館や小学校、区内の図書館で月15回くらいのおはなし会を開催し、山本亭で大人を対象にした年3回の語りの会も。今回は幼児対象で、1回目は手遊びと語り、そして紙芝居。2回目は全員でネコのゼスチャーから開始。会員が座り、子供の目線で反応を確かめながらゆっくりと話を進め、子供たちも楽しそうに答えるという親近感がありました。

14日(水)は「おはなしたまごの会」が登場。13年前、幼稚園で出会ったお母さんたち4、5名が結成し、児童館を中心に幼児を対象に大型絵本やパネルシアターも使ってのおはなし会を行っているといいます。フェルトを利用して作った大型のパネルに、Pペーパーと呼ばれるカラフルな材料を使って作ったというコンロ、なべに入れるようにしてにんじん、じゃがいも、こんにゃくなどを貼り付け、裏返しにしたりして“トン汁”を作ってみせました。取り上げる話も著作権の問題で許可が下りないものもあるとの話に苦勞のほどがうかがえました。



そしておはなしのへやでのウィークの最後を飾る11月17日(土)午後からはボランティアサークル「青い鳥」の紙芝居。このグループは5、6年前に結成、現在3グループに分かれて図書館や保健所などで活動しています。まず子供たちに遠足は?好きな料理は?と聞くことからスタート。二つの紙芝居の中でも問いかけながら、臨機応変に読んでいたのが印象的でした。

どのグループの皆さんも経験豊富な様子で、場慣れしていて、時々子供たちの笑い声や掛け声が出た楽しいイベントでした。

E. L. カニグズバーグ 著 松永ふみ子訳 (岩波書店)

中央図書館 吉村悦子

この本に出会ったとき、私は自分がクローディアくらいの少女だった時のこと、同じように不公平だと思っていたこと、そして、本当に家出したことなど思い出しました。そして、人間が成長していくには秘密が必要だということも…。

長女のためなにかと不公平で、毎日毎日同じだということと、なによりも、ただオール5のクローディア・キンケイドでいるのがいやになったとの理由で少女は、弟をつれて、ニューヨークのメトロポリタン美術館に家出をしました。なぜなら、ニューヨークという町は優美で、重要で、その上忙しい所で、今風の家出にはもってこいだったからです。美術館での暮らしぶりも、機知にとんでいます。

さて、クローディアと弟は無事メトロポリタン美術館でこっそり生活するうちに、ミケランジェロ作だと知られている「天使の像」にまつわる秘密のとりこになります。そして、その像を売ったフランクワイヤー夫人に会いに行きます。そこで、夫人と姉弟は秘密のやりとりをします。クローディアはこの秘密によって、ちがう自分になり家に帰りました。

フランクワイヤー夫人はこの本で「秘密は胸にもって帰るっていうのが、クローディアの望みのよ…。クローディアに必要な冒険は、秘密よ。秘密は安全だし、人をちがったものにするには大いに役だつのですよ…。」

と言っている。

この本は、少女のアイデンティティーの確立と成長の物語になっています。そして、大人が読むと自分の子どもの頃の事が深く考察できて、子どもが読むと、主人公とともに成長ができる良質な物語です。現代では、大人も子どもも安全な秘密を持ちにくくなっています。しかし、物語を読んでそのことを知ることはとても重要な事だと感じます。かつての少女の頃の私がこの本に出会っていたら、どんなに救われた気持ちになり、物語とともに成長ができたのではないかと思います。

おまけですが、姉弟が「天使の像」の事を図書館で調べるというのも気に入っています。ニューベリー賞作家のカニグズバーグさんの他の本も、子どもの心の奥の深いところまで巧みに書かれた作品が多くお勧めです。



(よしむら・えつこ 中央図書館友の会担当)

「葛飾図書館友の会」で一緒に活動しませんか！

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイディアを少しずつ実現してみませんか？

毎月第3土曜日の午後1時から4時まで中央図書館内で、また従来通り友の会開催イベント時に直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員は1,000円、賛助会員は1口2,000円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を下記の口座に納入してください。図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、24年度年会費とご記入下さい。また1口500円の寄付も大歓迎です。振替手数料は銀行窓口では120円、ATMからでは80円です。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。

ゆうちょ銀行	口座番号	00100-7-392065
	口座名称	葛飾図書館友の会

●問い合わせ先 中央図書館友の会担当者(打越さん、吉村さん、清水さん、白井さん) Tel 03-3607-9201

近所の本屋がつぶれてしまった。ある日、本を買いに行ったら、「閉店いたしました。」と手書きの紙が貼られていた。このあたりにははかばか大きな本屋で、この店ができた当時に小さな個人経営の本屋が2軒ほど店を閉めたのを覚えている▼困った。我が家から5分ほどの立地で買い物ついでにちよいと立ち寄り、なんとなく雑誌や新刊本を立ち読みできる素敵なスポットだったのに。もつとこの店で本を買おうと思ったのだ▼考えてみれば最近雑誌を昔のように定期的に買っていない。文春や朝日を駅のスタンドで買っている。電車で読む習慣はスマホの画面の中に埋没してしまった。本屋をウロウロして読みたい本を探すのではなく、アマゾンのカスタマーレビューの評価を頼りにしている自分。知らず知らずのうちに、ちいさな本屋さんの経営を圧迫することに荷担していたわけだ▼京成小岩や柴又駅あたりにあった6坪ぐらゐの小さな本屋さんたち。どんな小さな商店街にも必ず一軒は本屋が古本屋があった。近所から本屋が消えていく。町から文化がなくなっていくというのをおおげさだろうか。コンビニの雑誌棚にあるのは消費財としての本ばかり。本屋さんの棚のように素敵な本とめぐるあいだは期待できない▼なんとかしなければと思うけれど、今日もネットで本を注文してしまった自分がここにいます。

(矢野広報委員)

色えんぴつ